

ほんばこ



No. **68**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第 68 号（通巻第 84 号）

2023 年 3 月 13 日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

日本教育会館 5 F

教 育 図 書 館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<https://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ◆ 学校図書館運動史の中の日教組
～「経験主義教育」「専任司書教諭」「メディア・リテラシー」
富崎 豊和 2 ～ 3 p
- ◆ 《図書館から》 関東大震災から100年 教育図書館 4 ～ 5 p
- ◆ 最近の受入図書（2022年11月～2023年2月受入） 6 ～ 7 p
- ◆ 教育図書館のご案内 8 p

学校図書館運動史の中の日教組

～「経験主義教育」「専任司書教諭」
「メディア・リテラシー」

富崎 豊和

政争に消えた「幻の学校図書館法」

「私たちは最も高いガラスの天井を打ち破ることはできませんでした。でも、いつか誰かが打ち破るでしょう」2016年の大統領選挙後、敗北の悲しみに沈む、女性支持者たちを前に、ヒラリー・クリントンはそう呼びかけました。

その日から遡ること70年程前の1947年「私がステッキを持っていたら、日本の学校図書館で本が鍵のかかったガラス戸の中に閉じこめられているのを、うちやぶるだろう」と、戦後日本の民主教育復興に意気盛んな担い手たちを前に訴えた女性があります。GHQの要請で来日した学校図書館担当員メアリー・グレハムです。ヒラリーの演説が悲しみにくれる女性支持者を奮起させたように、メアリーの講演は戦後民主教育における学校図書館の存在を屹立させました。彼女の講演から文部省は、急ピッチに作業を進め『学校図書館の手引き』を翌年刊行します。それをもとに各地で開かれた講習会には「学校図書館を学校の心臓部に」との熱意に溢れた多くの教職員が集いました。

講習会参加者から学校図書館を振興する法の必要性が自然と語られ、法制定に向けた運動が盛り上がるのにそう時間はかかりませんでした。1953年3月には、免許制司書教諭を規定した学校図書館法（以下、学図法）案が整い、提案準備が進みます。日教組出身の大西正道（青森）衆議院議員が中心となり奮闘しますが、

提案寸前で国会は世にいう「バカヤロー解散」となってしまいます。翌国会に満を持して学図法が議員立法で提案されます。しかし法案は、免許制による司書教諭が資格制の充て職に変わっていました。しかも「当分の間、置かないことができる」との附則まで付けられていたのです。一夜にしての変貌に狼狽する関係者をしり目に、法案は文教委員会を討議省略可決し、午後の本会議で可決してしまいました。この間の不可解な動きについては、文部省の変心や政党間の暗闘、さらに贈収賄事件（被告、大西正道他 1964年最高裁控訴棄却）までからむ、松本清張の推理小説張りの様相が潜んでいるのですが、紙幅の都合で次へと進みます。

免許制の司書教諭を構想した法案は、いつしか「幻の学図法」と呼ばれるようになりました。かわりに規定された充て司書教諭でさえ、附則のためいっこうに配置されない事態に陥りました。附則の言う「当分の間」は、1997年の法改正により附則が撤廃されるまで、実に半世紀もの間続きました。その間に高校等で、制度が整備されないまま学校図書館司書の配置が進みました。

「専任司書教諭制度」を日教組考案する

法に規定しておきながら、それを附則によって事実上無にする規定を「ジョーカー規定」と呼びます。「幻の学図法」に関わった関係者は学図法成立の直後から、そのジョーカーを切るため附則撤廃運動＝学図法改正運動に腐心していきます。しかし、ジョーカーの威力があまりに強かったせいでしょか「附則撤廃のみでは、充て司書教諭が発令されるだけ」ということに気づかないままでした。

そのことに最初に気づいたのが日教組でした。日教組は1987年の臨時大会において、5条2項の「司書教諭は、教諭をもって充てる」の

改正を含めた「新しい司書教諭制度＝専任司書教諭制度」を運動方針化しました。今でこそ専任司書教諭という名称は、人口に膾炙していますが元々はこの時、初めて世に示された日教組によるものです。

名称の上に“兼任”をつけることはあっても、わざわざ“専任”と冠する職はそう多くはありません。あえて日教組が専任と打ち出したのは、充て司書教諭の配置＝附則撤廃のみに法改正をとどめるのではなく、専任司書教諭による学校図書館を展望したからです。専任司書教諭の新名称は、附則撤廃に傾斜した法改正運動の閉塞状況を打破するとともに、「幻の学図法」が構想した免許制司書教諭の理念を復活させる、日教組による苦心の作にして、会心の作でした。

メディア・リテラシーに学校図書館を

最初にメディア・リテラシー教育と学校図書館を結びつけたのも日教組です。日教組は1991年の日教組・全国教研集会から、新たに設置する「メディア・リテラシーと文化活動」分科会に学校図書館を位置付けました。国内で一般に向けてメディア・リテラシーが紹介されるのは、1992年に『メディア・リテラシー マス・メディアを読み解く』（カナダオンタリオ州教育省編 リベルタ出版）が出版される前後からです。日教組の取り組みは時宜を得たものだったといえます。また、メディア・リテラシー教育の中に学校図書館を位置づけることも他に例を見ない斬新な試みでした。

それまで学校図書館は「現代文化と教育」分

科会に位置づけられていました。そこでは、学図法成立前後の熱気は見る影もないほど、提出レポート数も減り、読書感想文コンクール等の実践が細々と交わされていました。学校図書館と言えば読書教育というのが通念化し、教育改革の論議の中でも取り残されがちでした。そのためメディア・リテラシーとの結合は、戸惑いを持って迎え入れられましたが、次第にコンピュータ教育とのシナジー効果を生み出す実践が交わされるようになりました。今ではメディア・リテラシー教育の中に学校図書館がなくてはならないものとなりました。探究学習を主体とする新たな教育改革を進める上でも、学校図書館は欠くことのできない存在となりました。

その陰の立役者として、アクチュアルな課題とともに、学校図書館運動に取り組んできた日教組がありました。

学校図書館は「民主主義のメディア」

「無料の原則」によって知る権利を保障する公共図書館は、民主主義の基盤を支えるメディアです。常に人権が保障され、格差によらず誰もが必要に応じて、様々な形で利用することができる「広場」が図書館です。そのことを子どもたちに伝える学校図書館もまた民主主義を支えるメディアです。

『闘う図書館ーアメリカのライブラリアンシップ』（豊田恭子著 筑摩書房 2022年）では、アメリカの中学校の図書館における「公民教室」の実践が紹介されています。生徒たちは、最初に憲法に保障された権利と議論のルールを学び、図書館の資料を用いて、環境、人種、移民、LGBT、銃規制等、意見や立場が分かれる社会問題について考察した後、学校司書の司会進行のもと、グループに分かれ意見を交わします。1年後、他校の生徒や地元の議員も招待し、生徒たちの主催・司会のもとで、社会問題を考



える公開イベントを開きます。生徒たちは学校図書館で議論の作法を学び、多様な価値観に触れ、政治へも参加していきます。

戦後日本の民主教育改革は新たな教科、社会科学を中心とした経験主義教育を基本に始まりました。デューイの説く「ラーニング・バイ・ドゥーイング」の理念を教材化し1947年1月、新橋にあった桜田国民学校で最初の社会科の授業をしたのは、日下部志げという小学校の女性教員でした。同じ年の3月、お茶の水女子大学における講演で、書庫にすぎなかった日本の学校図書館のガラス戸を打ち破ったのは、メアリー・グレハムでした。80年近くも前に彼女たちが戦後日本の民主教育の端緒を開きながら、いまだジェンダーの壁が女性の政治参加を阻んでいます。彼女たちに影響を与えたアメリカでさえ、厚いガラスの天井が存在しています。

日教組は、民主主義の復興と子どもを中心とした経験主義教育による戦後教育改革を主導してきました。その中に学校図書館を位置づけ、書庫から探究学習の中軸に、充て司書教諭から専任司書教諭制度、読書教育中心からメディア・リテラシー教育への結合と、時代とともに役割を果たしてきました。幾度かの系統主義教育のより戻しを乗り越え、今また経験主義教育が見直されています。探究学習に果たす学校図書館の役割を再びクローズアップするとともに、「民主主義のメディア」としても学校図書館を飛躍させる。フェイクニュースや不寛容の広がり等によって、民主主義が危機に瀕している時、日教組が学校図書館運動に果たすべき役割はまたも大きくなっています。

(東京都高等学校教職員組合執行委員長・
日本教育会館理事)

《図書館から》

関東大震災から100年

トルコ南部のシリア国境近くで2月6日に起きたマグニチュード7.8の地震やその後の大きな揺れにより、トルコとシリアの両国で大きな被害が出ています。1日も早く穏やかな暮らしが戻りますよう祈るばかりです。

今年は、東日本大震災から12年、関東大震災からは100年となる節目です。防災・減災について考えるきっかけとして、内閣府と気象庁のサイト、図書を紹介したいと思います。

内閣府「関東大震災100年」特設ページ

この特設ページでは、関東大震災の関連資料や報告書等について掲載、概要が知ることができます。以下は抜粋しました。

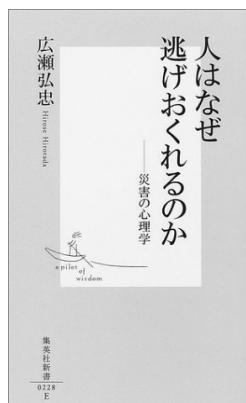
大正12年(1923年)9月1日11時58分に、相模湾北西部を震源とするマグニチュード7.9と推定される関東大地震が発生、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県で震度6を観測し、10万棟を超える家屋を倒潰させました。また、発生が昼食の時間と重なったことから、多くの火災が発生し、大規模な延焼火災に拡大しました。死者・行方不明者は約10万5000人に及ぶなど、甚大な被害をもたらしました。

火災による死者は約9万2千人で、それ以外の約1万3千人のうち、強い揺れで住宅が全潰したことによる死者数は約1万1千人とあり、東京本所の陸軍被服廠（ひふくしょう）跡地（現在、両国国技館の北隣にある東京都慰霊堂の敷地）で、火災旋風によって4万人余りもの人々が亡くなったことも記されています。

気象庁「関東大震災から100年」特設サイト

関東大震災の概要から観測データ・解析結果、関東大震災の記録など詳細に掲載されています。また、最近の地震、災害情報も検索できるので、幅広く知識を深めることができます。

ところで、災害に遭遇したとき、生死をわける判断があります。『人はなぜ逃げおくれるのか-災害の心理学』(広瀬弘忠著 集英社 2004 年 1 月発行 2020 年 4 月 12 刷) は、安全に慣れてしまって、危険を実感できないでいる



現代人の心の働きについて、災害とは何かということを考えながら書かれています。「心の働きで重要なことがある。私たちの心は予期せぬ異常や危険に対して、ある程度、鈍感にできているのだ。日常の生活をしていて、つねに移り行く外界のささいな変化にいちいち反応していたら、神経が疲れ果ててしまう……。そのようなわけで心は、“遊び”をもつことで、エネルギーのロスと過度な緊張におちいる危険を防いでいる。ある範囲までの異常は、異常だと感じずに、正常の範囲内のものとして処理するようになっているのである。このような心のメカニズムを“正常性バイアス”という。この正常性バイアスが、身に迫る危険を危険としてとらえることをさまたげて、それを回避するタイミングを奪ってしまうことがある。」と、心の働きに着目しています。

思い起こすと、2022 年 10 月 29 日の夜に韓国の梨泰院でハロウィンに集まった圧死事故なども、人が密集した場合に何が起こるのか、正常性バイアスを考える例かもしれません。

また、筆者は人間が快適な生活を求めるための営為によって新たな災害がつくり出され、これに対応していかなければならないといっています。

「より豊かで、快適な生活を求める人間の営為が、それまでそこにあった自然を変えていく。このようにして集積された自然に対する人為のインパクトが大きくなっていくと、反作用としての新しい

タイプの災害が次々と現れてくる。私たちは、それら一つひとつ対応していかなければならないのである。いかに激しく自然が猛威をふるったとしても、そこに人間の営みがなければ災害はない。」

自然災害に対して、寺田寅彦も随筆「天災と国防」(『天災と日本人』寺田寅彦著 山折哲雄編 KADOKAWA 2011. 7) で次のように言っています。

「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならぬはずであるのに、それがいっこうにできていないのはどういうわけであるか。その主なる原因は畢竟そういう天災がきわめて稀にしか起こらないで、ちょうど人間が前車の転覆を忘れたところにそろそろ後車を引き出すようなことになるからであろう。」また、『第三の災害』(三寺光雄著 東京堂出版 1976) では、昭和 47 年の集中豪雨が地すべり、がけ崩れを発生させ、災害列島になってしまった状況について、「天災とか異常気象という言葉は怠慢な国土保全政策の責任逃れに使われているのではないかとさえ思わせることがある。」と開発のかけで置き去りにされた災害対策の不備が述べられています。

いずれにしても、災害は甚大化する傾向にあり、早めに避難することが大事で、最も古くからある素朴で有効な防災行動であると筆者(広瀬弘忠)は述べています。「逃げる時に逃げ、さけるべき時にさけることが、安全を確かにする最上の策である。この考えかたは、自然災害だけでなく、すべての災いに通用する原則である。」と、避難行動の重要性、避難行動の仕組み、に言及しています。

いつ、どこで、どのようにしてやってくるかわからない災害に対して、危険を察知することで被害を軽減することが防災の目的であり、その努力を惜しんではいけないと思います。

(教育図書館 川内)

最近の受入図書

(2022 年 11 月～2023 年 2 月受入)

【日教組刊行物】

『月刊 J T U』改題 142－190 号 日本教職員組合編集・発行 (2019. 1－2022. 12)

『いんふおめーしょん子どもの人権連』
No 152－163 子どもの人権連事務局編
(2017. 3－2019. 12)

『第 13 回 TOMO－KEN・報告集』
日本教職員組合編 2022. 10

『憲法・平和・教育を守る母と女性教職員の
会 全国集会 報告集 2022 年』日本教職員組
合編 アドバンテージサーバー 2023. 1

【教育総研・県教組刊行物】

『「ゆたかな学び」としての学校づくり研究
委員会報告書』今こそ「ともに生きる」教育
を－「インクルーシブ教育」を問い直す
教育総合研究所 2022. 12

『「リスク社会と子どもの人権」研究委員会
報告書』リスクを管理しようとする社会の危
うさを考える 教育総合研究所 2022. 11

【文部科学省関係・法令集等】

『学校保健統計令和 3 年版』文部科学省
株式会社双葉レイアウト 2022. 12

『文部科学法令要覧令和 5 年版』文部科学法令
研究会監修 ぎょうせい 2023. 1

【平和資料】 寄贈

『日本の古都はなぜ空襲を免れたか』吉田守男
著 朝日新聞社 2002. 8

『学徒出陣』蜷川壽恵著 吉川弘文館 1998. 8

『東部軍軍医部指導空襲下の救護法』東京都青
少年団 編 富永興文堂 1943. 11

『夜の記憶』澤田愛子著 創元社 2005. 5

『白薔薇は散らず』インゲ ショル著 未来社
1960. 11

『少女たちの戦争』木村礎著 日本経済評論社
1987. 7

【防災・減災】

『復興を生きる』河北新報社編集局編 岩波書
店 2022. 8

『東日本大震災 10 年復興の歩み : 宮城・岩
手・福島 : 報道写真集』河北新報社 2021. 3

【和雑誌】

『内外教育』No. 6965－6993 時事通信社編
時事通信社発行 2022. 1－4【合本】

『内外教育』No. 6994－7020 時事通信社編
時事通信社発行 2022. 5－9【合本】

【教育・経済・社会】

『非正規公務員のリアル』上林陽治著 日本評
論社 2021. 2

『東京五輪の大罪』本間龍著 筑摩書房
2021. 12

『公教育制度の変容と教育行政』横井敏郎、滝
沢潤、佐藤智子編著 福村出版 2021. 10

『戦後教育学の再検討』上・下 田中孝彦、田
中昌弥、杉浦正幸、堀尾輝久編 東京大学
出版会 2022. 4

『教科専門性をはぐくむ教師教育』日本社会科
教育学会編 東信堂 2022. 4

『先生を、死なせない。』妹尾昌俊、工藤祥子
著 教育開発研究所 2022. 8

『メディア・リテラシーの教育論』中橋雄編著
北大路書房 2021. 2

『公教育の市場化・産業化を超えて』教育政策
2020 研究会編 八月書館 2016. 11

『学校社会の中のジェンダー』木村育恵著 東

京学芸大学出版会 2014. 4
『学制百五十年史』文部科学省著 ぎょうせい
2022. 12
『デンマークのシティズンシップ教育』原田
亜紀子著 慶應義塾大学出版会 2022. 5
『聞く技術聞いてもらおう技術』東畑開人著
筑摩書房 2022. 10
『ルポ 食が壊れる』堤未果著 文藝春秋
2022. 12
『15 歳からの社会保障』横山北斗著 日本評論
社 2022. 11
『運動脳』アンデシュ ハンセン著 サンマー
ク出版 2022. 9
『1958 年「教員の勤務評定」紛争の研究』
野間教育研究所紀要第 60 集 米田俊彦著
野間教育研究所 2018. 11
『いじめ加害者にどう対応するか』斎藤環・内
田良著 岩波書店 2022. 7
『小さなまちの奇跡の図書館』猪谷千香著・
文・その他 筑摩書房 2023. 1. 10
『マインド・コントロール』紀藤正樹著 アス
コム 2017. 3
『我々はどこから来て、今どこにいるのか?』
上・下 エマニュエル トッド著 文藝春秋
2022. 10

【家庭・芸術・趣味・文学一般 ほか】

『傲慢と善良』辻村深月著 朝日新聞出版
2022. 9
『しろがねの葉』千早茜著 新潮社 2022. 9
『天路の旅人』沢木耕太郎著 新潮社
2022. 10
『黒武御神火御殿』宮部みゆき著 KADOKAWA
2022. 6
『理想の父にはなれないけれど』じゃんぼ〜る
西著 KADOKAWA 2022. 3
『地図と拳』小川哲著 集英社 2022. 6

『幸福とは何ぞや』佐藤愛子著 中央公論新社
2022. 9
『荒地の家族』佐藤厚志著 新潮社 2023. 1
2022. 10
『拾われた男』松尾諭著 文藝春秋 2022. 6
『嫌われた監督』鈴木忠平著 文藝春秋
2021. 9

寄贈

『「差別表現」を考える』日本ペンクラブ編
光文社 1995. 10
『デューイの教育哲学』佐々木秀一著 協同出
版 1965
『桐の葉の陰に学びて』復刻版 佐々木秀一
著 1971. 5
『佐々木秀一遺稿集 念珠の縁』佐々木秀一著
2022. 8
『遊廓と日本人』田中優子著 講談社
2021. 10
『「職員室」の心の病』大原健士郎著 講談社
2002. 8
『英語化する日本社会』ハーバート パッシン
著 サイマル出版会 1982. 12
『文化なき文化国家』福田恒存著 PHP 研究所
1980. 11
『幕府オランダ留学生』宮永孝著 東京書籍
1982. 3
『「非労働時間」の生活史』川北稔編 リプロ
ポート 1987. 3
『徳川慶喜家の子ども部屋』榊原喜佐子著
草思社1996. 11
『日米交換船』鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創著
新潮社 2006. 3
『津田梅子』大庭みな子著 朝日新聞社
1990. 6
『南原繁の言葉』立花隆編 東京大学出版会
2007. 2

教育図書館のご案内

《利用方法》

開館日：（火）・（水）・（木）

開館時間：午前10時～午後4時30分

閲覧：メールにて事前予約をお願いします。

✉ toshokan32304437@jec.or.jp

貸出：利用者カードの発行が必要です。

身分証明書をご持参ください。

（貸出5冊 3週間）

レファレンス・サービス

当館所蔵の図書資料に関するお問い合わせは
メールでお申し込み下さい。

コピー：白黒1枚10円／カラー30円

《特別コーナー》

- 平和資料コーナー
反核・平和運動、平和教育教材・実践記録、
戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー
日教組教育新聞・教育評論・月刊JTUなど
- 教育総研刊行物コーナー
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」、各研究委員会報告書など
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導
要領、指導書など
- 海老原治善文庫：元東京学芸大学教授、教育
総研初代所長海老原治善氏からの寄贈書
- 鈴木喜代春文庫：児童文学者、元教育相談室
相談員鈴木喜代春氏の著作本、寄贈書
- 人権・防災・減災コーナー
人権関係、東日本大震災など災害の記録等

《蔵書について》

- 教育関係図書を中心に和書、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌などを収蔵しています。
- 蔵書数 約69,000冊
- 教育図書館のホームページから蔵書検索できます。

(<https://www.jec.or.jp/tosho>)

《アクセス》

神保町駅 A1出口より徒歩3分

九段下駅 6番出口より徒歩7分

竹橋駅 1b出口より徒歩5分

水道橋駅西口 徒歩12分（JR総武線）

アクセス抜群

神保町駅から3分

802名収容の大ホール



日本教育会館
ツタホール・会議室のご案内
一般財団法人日本教育会館

**10～300名
まで使える
会議室(18室)**

**1階画廊
もご利用できます**

一般財団法人日本教育会館
TEL 03-3230-2831
<https://www.jec.or.jp/>
受付時間 9:00～17:00